

〈 4. “Fogbound Society” 研究会 〉

4-3. 患者を前にしたときに開かれる医療従事者の三つの次元の行為

——ラカンの「論理的時間」をもとにした『ジョニーは戦場へ行った』の解釈から——

塩飽 耕規

要旨

本論は、ラカンの「論理的時間と予期される確実性の断言」（『エクリ』所収）を参考にしながら、医療従事者の行為を定義し直す試みである。この試みからは、〈零次行為〉、〈一次行為〉、〈二次行為〉、と暫定的に筆者が呼ぶ三つの行為概念が導きだされる。これらの三つの行為概念は、行為があらかじめ含意していた「動機」や「目的」などに基づいて分類されたものではなく、行為を被る者側の人間の経験内容の変化に応じて区別される。一方で本論は、絶えず行為が生成し続ける医療実践という観点から、ラカンの思考実験的な時間論を検討し直し、それらに新たな意味を付与するという意義ももっている。ただし本論は、行為者とそれを被る者との非対称的対人関係があらかじめ成立しているということが条件となっている。つまり、行為を被る者による能動的な行為は保留され続ける。そういった条件が実現された素材として、映画『ジョニーは戦場へ行った』が選ばれている。この映画の主人公のジョーは、顔や四肢がないため、能動的に他者に働きかけることは最後まで宙づりにされ続ける。いわゆる患者と医療者の人間的なやりとりは最後のシーンまでズレ続ける。それゆえに、行為者として描かれるのはむしろ脇役であるはずの医療者なのである。その点で本論は、今後、対面状況における行為と行為の交差を論じるための予備的な考察にすぎない。

1 映画『ジョニーは戦場へ行った』¹のあらすじ

第一次世界大戦下、戦場で被弾したジョーは、両手両足と顔面を吹き飛ばされ、目も耳も鼻も口も失いつつも、なお生きながらえた。そんな彼を手術した軍医は、脳の延髄以外の機能が完全に停止していると判断し、医学的な『研究材料』としてそれを生かし続けることに決める。そして軍医は、『よい看護師は患者に感情的に関わってはならない。自分がそうならないために』と言い放つ。しかし実は、彼はそのような体になってもなお鮮明な意識をもっていた。ただし、彼には周囲に自分の意志を伝える手段がない。彼は、唯一自分に残された皮膚感覚を頼りにして、受動的に外界を認識しながら、積極的には夢のなかで生きようとする。

1 この映画は、1939年、ドルトン・トランボによって執筆された同名小説（原題、Johnny got his gun）を、作家自身が1971年に映画化したものである。本論における登場人物のセリフの引用は、2005年に角川映画から字幕付きで発売されたDVDビデオ『ジョニーは戦場へ行った』からの引用である。セリフの引用は『 』で示す。なお、筆者の判断で字幕の翻訳に変更を加えている箇所がある。

当初彼は、自分の置かれた状況に気付かないまま、戦争へ行く直前の思い出である夢のなかにいた。戦場へ赴くまえの恋人との情事や、父親の死との直面が今の彼には現実だった。その後彼は、指令書に従った看護を受けながら、彼は自分の体の外縁を把握しはじめる。そして自分の置かれた状態に絶望した彼は、夢の中で自分が幼かったことの記憶へと遡り、自分の体をやさしく懷抱してくれた母親や、釣り竿の意味や魚釣りのやり方を教えてくれた父親との思い出にふけるようになるのだった。

いつしか彼は、自分の経験していることが夢なのか現実なのかの区別すらできていないということに気付く。そこで彼は、夢のなかで、キリストと呼ばれる大工の男に現実と夢を区別する方法を尋ねるのだったが、その答えに対してことごとく疑問をさしはさむ。今や彼は、悪夢とそれと同じだけ恐ろしい現実を区別することは不可能だと知る。

そんなあるとき、看護師長が彼の置かれた物置にやって来て、窓の閉め切られたその部屋に太陽の光を入れるよう指示する。彼は日光のぬくもりを触覚的に感じられるようになり、神の存在に感謝するのだった。昼と夜が区別できるようになった彼は、日にちを数えはじめる。しかし、一、二、三…と日にちを足していったところで、彼には本当のところ今がいつなのかわからない。

その看護師長は一度彼の部屋にきたきりだったが、その後看護師が変わる。新しい看護師は、ベッドの横に一輪の花を添え、彼に話しかける。その後彼は夢のなかで、田舎に残してきた恋人への会えなさに苦しむようになる。そんななかその新しい看護師は、涙を流しながらジョーの男性器を愛撫する。

それからどのくらい日にちがたったのかわからないが、時は年末、新しい看護師は、ジョーの胸の上で『MERRY CHRISTMAS』と指でなぞる。もちろん、まだ彼女にはジョーに意識があることはわかっていないのだが、それによって、彼は『日付のはじまりを獲得した!』。その直後彼は決定的な夢をみる。夢のなかで彼は、恋人と隠れん坊をしているのだが、すでに永遠に彼女を失ってしまったことを悟り、そして同時に、父親から自分の意志を他人に伝える手段を思い出させられるのであった。それは、彼がこどもの頃モールス信号で友達と遊んでいた、という記憶だった。

彼は、首を縦に振ることで、モールス信号のSOSを看護師に必死で伝えようとする。看護師は、リズムのとれたその運動が筋肉痙攣ではないはずだと思い、軍医や電信士や聖職者を呼んできて、彼が何かを伝えようとしていること、彼が意識をもっていることを理解させた。そのときはじめて、周囲の人間は、彼がこれまでずっと意識をもっていたことに気付いたのである。軍医はまず、『あなたは何を望むのか』と彼の額のうえに電信する。彼は自分が生き延びるための手段をしばらく考え、こう答える。『私は外に出ることを望む。そうすれば、人々は自分がこのような存在であることを見れるようになる。カーニバルジョーに自分を出してください。…もしあなた方が私を世間に見せることを望まないのであれば、私を殺してください』。

軍医は、『彼は混乱しているのだ』といい、その場に立ち会っている人全員に、この経緯の他言を禁じ、その部屋の窓を再び閉めた。軍医たちが退室したのち、ひとり部屋に残った看護師は、彼の呼吸用のカテーテルに栓をし、ジョーを殺そうとする。しかしその行為が完遂するまえに、軍医に見つかってしまい、彼女は部屋を追い出される。そうして誰にも届かないジョーのSOSだけが、暗い部屋にこだまし、映画は終わる。

2 「炸裂した身体」とそれに向けられる軍医のまなざし

映画は、主人公のジョーの身体が被弾によって炸裂したという事実からはじまる。しかし、映画の前半においては、自分のものであるはずの「炸裂した身体 (corps morcelé)」²と関わっていないジョーは、夢のなかに生きることですらの生を謳歌している。彼の事実に身体を産み出した被弾という出来事、本人にとっては圧倒的すぎて記憶することのできないはじまりの出来事は、彼の手の届かないところにある。そんな夢のなかでの彼は、まさに今、恋人と抱き合う喜びを享受している最中なのである。彼にとって過去は、今との時間的な隔たりをもたず、記憶残滓として機能するわけでもなく、それゆえ、過去の現在への流入という仕方ではなく、それ自体が生きられるという仕方で現れている。

ジョーの生と切り離されたまま単独でそこにある事実に身体を、まずはじめにまなざすのは、軍医たちである。彼らは、「炸裂した身体」がある場所（そこは観客の身体がある場所でもある）をまなざしている。彼らは、自らのもっている解剖学的知識をもとに、それを意識をもたない生きた『研究材料』として把握する。

ここでの知識にもとづく把握とは、ハイデガーのいう「として構造 (Als-struktur)」³の作動である。なんらかの知識をもつ者は、目の前の何かをつねにすでにある特定の意味をもったものとして把握している。この映画の場合、その「として構造」は、目の前の「炸裂した身体」を、延髄の機能による自動的な活動の限界が訪れるまで呼吸と鼓動を続けるだけの物体として意味づけるよう軍医を仕向けている。この構造は、観察する者がそれまでに獲得してきた先入見あるいは「臆見 (Doxa)」⁴に従って作動している。また、知識をもつ者に対してこれこれのものとして現れてくる何かは、これこれのためという意味とともに現れてくる。つまり、『他の患者を救う』ために。特定のものとして、ある目的のために、という意味を連れ立って現れてくる目の前の何かから届けられる知覚刺激は、解剖学的知識をもつ軍医たちにとっての世界につなが止められる。すなわち、軍医たちのその把握の背後には、「時間空間的に個別化されて存在する諸客観 (実在) の世界としてのあらかじめ与えられた世界、あるいは、すでに親しまれた世界 (schon vertraute Welt)、その予描としての地平において古くから知られており、典型的にすでに知られた世界」⁵がある。

軍医たちにとってのこの「として構造」の作動は、彼らがまなざしを向けると同時に、最初の一手から生じている。ここでのまなざしは、「すでに親しまれた世界」を構成している諸々の意味にふさわしいか否かのどちらかを、即座に彼らに決断させる。つまり、目の前の「炸裂した身体」は、彼らにとって、自分たちがもっている知識の証拠になるか反証になるかのいずれかの価値しかもちえない。「として構造」は、目の前の事実のなかに証拠を見いだす実際の作業によってのみ維持されうるし、さらにいえば、その作業を促している。もしも目の前の何かが反証となったとしたら、軍医たちは、自らの知識の一部を事実即して改変する時間をもつことになったかもしれない。しかし彼らは、一瞬

2 Lacan, J. : Le stade du miroir comme formateur de la fonction du Je : Ecrit, Paris, Seuil (édition en poche), p.96, 1999.

3 Heidegger, M. : Sein und Zeit, Niemeyer, Tübingen, § 32, 2001.

4 Husserl, E. : Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, Nijhoff, Hague, § 30, 1976.

5 Husserl, E. : Die Lebenswelt : Auslegungen der vorgegebenen Welt und ihrer Konstitution, Springer, Netherlands, p.61, 2008.

のうちにそこに証拠を見いだしたのである。人間でないものとも断言し難く、自分たちが同一化できるような人間とも断言し難い何かをまなざした軍医たちは、一定の人たちに共有された知識を、知覚の場において証したわけである。

彼らのまなざしは、それが瞬時の決断と結びついている限りにおいて、メラニー・クラインのいう「無意識の幻想 (unconscious phantasy)」と重なる。ただし、彼らの知識が間違った知識だからとか、あるいは現代からすると古い知識にもとづいた間違った診断だからという意味で、彼らのまなざしが幻想なのではない。そうではなくて、知識が目の中の事実に行先するものとして「すでに親しまれた世界」のなかに布置されており、彼らがその「として構造」の作動にからめとられながら、まなざしの差し向けにおいて、瞬時に事実を証拠に至らしめた、という意味で彼らのまなざしは「無意識の幻想」なのである。

知識が事実のなかで証拠だてられるという考えは、クラインが「現実検討 (reality-testing)」に彼女固有の意味を与えるときにみられる考えである。彼女によると、人間はまずはじめに、情動と身体感覚の絡みあった視覚像以前の純粹な幻想のなかに生きていて、次いで知覚の場という事実に出会う(クラインにとって、この順序は不可逆的で絶対的である)。そして事実、その事実があらわれた時点ですでにもっていた自分の「無意識の幻想」の「証拠 (proof)」となるのか「反証 (disproof)」になるかのいずれかの価値しかもちえない。彼女の考える知覚の場は、「無意識の幻想」の「証拠」があらかじめ用意された場であるか、あるいは「反証」という新規性以上のものはもちえない場なのである。

ところで、軍医たちが自らの知識を事実のなかで証拠立てたこの作業は、ジョーのものでなければならなかった「炸裂した身体」と彼の生の解離を下支えしている。

軍医たちから『研究材料』と断言されたジョーは、いまだ事実に身体と切り離されたまま、ふいに、父の死体を前にするという夢を生きる。その直後に彼は、自身の「炸裂した身体」に気付きはじめるようになるのだが、彼は、今まさに誰かから両腕と両足を切りとられていると錯覚する。彼は『切るなら同意をとれ!』と叫び続けるのだが、発声するための器官をもたない彼の叫び声は、周囲の人間の誰にも届かない。彼はふいに「炸裂した身体」を獲得したわけだが、しかし今なお、この事実に身体を生み出した被爆は記憶から省かれており、彼は、自分の声が誰にも届かないという事実ですら気付いていない。

6 Klein, M.: The Psycho-Analysis of Children, London, Vintage, § 10, 1932. クラインは、女の子のおまごとの例をあげながら、知覚の場が証しの場になることを説明する。「彼女がお人形をもっているということは、彼女がお母さんから自分のこどもを奪われていなかったということの証明 (proof) になり、お母さんから体を破壊されていなかったということの証拠になり、こどもをもつことができるということの証明になるのである」(ibid., p.182)。お人形を自分の手で触り、自分の目で確認し、自分の鼻でそのにおいを嗅ぐという作業によって、女の子は、自分の「無意識の幻想」を証すのである。ただし通常クラインは、生まれてすぐのこどもが、お母さんの(部分対象としての)身体を攻撃してしまっているため、その報復として自分の体を破壊されこどもをもてなくされたという幻想のなかに生きていて考える。それをふまえてより正確にいうならば、小さなこどもがお人形を知覚することは、自分の「無意識の幻想」の「反証」としての価値が与えられるというほうが正しい。逆に、お人形を知覚できないことが持続する場合、そのことによって彼女の自然で攻撃的な「無意識の幻想」が活性化されるのである。その意味では、他人(多くの場合母親)が「反証」を呈示することができるかどうか、こどもが深層の世界から抜け出せるかどうかの指標となるといえる。ちなみに、クラインは、「現実によってテストしたいということのこどものニーズは、その子の知識本能 (instinct for knowledge) の発達の誘因である」(ibid., p.178)と考えている。

3 デカルト的懷疑とそれに終止符をうつ看護師長の感情移入

両手両足を切られたことに絶望する彼は、朦朧とする意識のなか、幻聴として聞こえてくる母の声と対話する。

ジョー：『僕が現実だという夢をみてるんだ。母さん僕目を覚まして。そしてこれが現実ではないと言って。』

母の声：『私にはあなたがどこにいるのかわからないわ。何があったの。神だけが現実的なものだというのを思い出してごらん。あなたは生そのものの姿（image）に似せて創られたのよ。あなたは神という現実的なものの完全な映し（reflection）なのだから、だからあなたは現実なのよ。』

ジョー：『いや母さんは間違っている。これは夢だ。夢に決まっている。これは真実じゃない。⁷』

そうつぶやきながら彼は眠りに落ち、こどもの頃の夢をみる。そこでは小さくも十全な彼の体は母親によってケアされている。また彼は、そのなかで、父親がそうしているように自分の全身をきれいに洗おうと決心するのである。彼は今や、悪夢より恐ろしい現実を否認し、一つの身体の上に統一された諸感覚を現実よりも享受できる夢のなかに引きこもうとするのである。しかしそのとき、そもそも自分が今触知しているものが夢なのか現実なのか、という懷疑が彼をとらえる。

彼の額は今ねずみにかじられている。視覚像においてではなくて、皮膚感覚においてそういえるのである。しかしそうであるがゆえに、彼にはそれが夢なのか現実なのかかわからない。彼には五感のなかで唯一触覚が残されているので、自分の額の痛みは夢でも現実でも感じられるのだが、そのために、その痛みが夢のなかでの痛みなのか現実のなかでの痛みなのか、彼には判別できないのである。『[額をかじる] ねずみが現実で、[額の抜糸をする] 看護師が夢なのか。どうすれば夢と現実が区別できるのか』、彼は自力でそれを確かめる術をもたない。

そこで彼は、夢のなかで（といっても彼はそれすら夢であると信じようとししないのだが）、キリストと呼ばれている人物に、夢と現実を区別する方法を尋ねる。キリストは彼にいくつかの方法を教えるのだが、彼は、キリストの提案のひとつひとつに疑いをさし挟んでいく。

感覚されている内容の由来を疑い現実と夢が区別できなくなったジョーは、デカルトの方法を遂行しているといえる。デカルトは次のように書いている。「私はたしかに、この一切れの紙を醒めた目で直観している。私が動かしているこの頭は眠っていない。私がこの手を伸ばし、私が感覚しているということに慎重になっているし、そのことを知っている人間として [私はある]。これほどまでに判明なことは、眠っている人には起こらないであろう。[しかし] それでは、あたかも私が、別の機会で、夢のなかの似たような考察によって騙されたことを憶えていないかのようではないか。このことを注意深く考察してみると次のことがわかる。すなわち、私の感覚が麻痺しているような基準（criteria

7 ここまでのあらすじを初期ラカンの用語だけで解説すれば次のようになる。当初「炸裂した身体」と切り離されていた彼は、このとき「鏡像段階（le stade du miroir）」（*ibid.*, p.92）に達する。つまり、完全なる存在の虚像として彼は自らを与えられるのである。しかし目がない彼のもとに届くのは母の声という幻聴であり、その幻聴は彼の耳を通り過ぎることしかできない。

that I be stupefied) によっては、目覚めていることを眠っていることから区別することは決してできないのである。そして、この麻痺そのものが、[今まさに] 眠っているという考えを私にほとんど確信させほどなのである⁸。ジョーは、まるでデカルトが手のひらのうへのざらつきによって知られうる一切れの紙の実在性を疑ったように、額のうへの痛みを通して知られうるねずみあるいは看護師の実在性を疑うのである。デカルトは五感すべてとそれを通じて得られるものの実在性と真理性を疑わなければならないのだが、ジョーの場合は、幸か不幸か、すでに五感のうち四つがないので、唯一触覚のみを懐疑の遡上にのせればよい。

ただし彼は、思考している内容でさえ悪魔によって欺かれ続けているものにすぎないのではないかと疑うほどの徹底したデカルト的懐疑を遂行するわけではない。そのような事態に至る前に、彼は、欺かれながら思考し続ける道を選ぶことになる。彼が徹底した懐疑の道ではなく欺かれる道を選んだことは、突然あらわれた看護師長の介入と間接的に結びついている。

看護師長が彼の安置されている物置小屋に突然あらわれ、ジョーに日光があたるようにその部屋の窓を開ける。それはナイチンゲールの『看護覚え書き』の一節に従った行為である。その看護師長は、『彼は、その違い[光が当たることとあたらないことの違い]を知ることができないのではないのでしょうか…』という部下の進言に対して、『私にはできます (I can) !』と自信たっぷりに答える。すなわち、彼女は、禁忌とされていた『感情的かかわり (emotional involvement)』をジョーに対して行ったのである。そのとき彼女は、自らを、他人の経験世界と想定されるものに移し入れているので、この『感情的かかわり』を、感情移入あるいは移入 (Einfühlung)、さらには、共感的理解 (empathic understanding) とも言い換えることができる。彼女の感情移入は、「もし私が彼だったら (If I were him)」という仮定のうえでこそ成立する感情移入である⁹。そしてまさにこの看護師長は、自らを彼がいる場所に移し入れたからこそ『私にはできます!』と言い切ることができたのである。ただしこの感情移入においては、ジョーの知覚や望みは問題になってはいない。というよりも、それを問題にすることはできない。「他人の気持ちになって考えなさい」という教育的配慮がそうであるように、「もし私が彼だったら」という仮定こそがこの感情移入を感情移入たらしめているのである。

禁忌を破ったこの看護師長は、映画のはじめに明示された教訓によって罰を受けることになる。つまり、感情移入をしたことによって彼女はジョーになってしまい、彼が引き受けなければならない悲惨さと直面してしまったのである。この看護師長は、『かわいそうに』とつぶやき、そそくさとこの部屋を出、二度と姿をあらわさなくなる。

彼女の一度きりの感情移入を、ハロルド・サールズに従って、次のように解釈することができる。

8 Descartes, R. : *Meditations on First Philosophy* (A bilingual edition), London, University of Notre Dame Press, p.91, 1990.

9 筆者は、感情移入や共感的理解において指し示されている感情 (feeling) と、情動 (emotion) を定義上区別している (塩飽耕規、『平等に漂う注意』とは何か：精神分析的経験の解釈学的解明の試み、京都文教大学での発表、2010年5月8日)。感情には愛情や怒りに代表されるような持続するものが入り、情動には、地平が破壊されるときに今という時勢においてしか生じないもの、すなわちおどろきが入る。さらに今は、この情動のなかに笑いをつけ加える必要があると考えている。笑いは、今においてしか生じない情動のひとつであり (笑い続けるのは余韻、本論で名付けている〈二次行為〉と関係があると思われるが、紙幅の関係上、その関係性を論じることは今後の課題としたい)。

10 ラカンであれば、このように be 動詞で自己と他人が結びつく関係性を、「同一化 (identification)」(ibid., p.93) と考えるだろう。

医療関係の職業についてた者は、自分の力では癒してやれないほどの患者を前にすると「罪責感 (feeling of guilty)」を感じるわけだが、その罪責感は、自分は誰かの役に立てるだけのものであるという「全能感 (omnipotence)」の裏返しにすぎないのである。¹¹ サールズの考えを援用するなら、この看護師長が現場から身を退けたのは、彼女の『私にはできます (I can) !』という「全能感」を守るためだったからだということになる。

とはいえ、たとえ一回きりだったとしても、看護師長の感情移入にもとづく行為が結果的に彼の懐疑に終止符をうつことになる。というのも、彼女の行為の結果として、ジョーは日の光を皮膚で感じることができるようになり、自らの触覚への信頼を取り戻し、光に照らされながら『他に何もなくても、神は常にある』と確信したからである。そしてその高揚感のなかで彼は、昼と夜の違いを感じ分け、思考のなかで日にちを延々と数え上げるようになる。彼は、意識のうえで、一年間、ただひたすら日にち、週、月をひとつひとつ足し続ける。しかしいつしか彼は、自分の数え上げの『はじまりがいつなかわかっていない』ので、その作業は無意味であることに気付く。つまり、彼は一年間、彼に対して現れたり消えたりする光、つまり神に欺かれ続けていたということになる。実際、映画のなかで本当に一年経過しているのかどうかはあやしい。

そこで彼は真のはじまりを探しはじめる。そしてついに彼は、自らの事的身体を生み落とした出来事、つまり被弾という出来事を思い出すことに成功するのである。その後の彼の夢は、今と過去、こことあそこ、現実と空想とが入り混ざったものになる。それは夢が本来の意味での夢の機能を回復することでもある。しかし彼にとって、被弾というはじまりの出来事が今とどれだけ隔たっているかわからないままであることにはかわりはないので、彼は寝ても醒めても『時間のことばかり考えている』。

4 ジョーのニーズとそこに自らをはめ込んだ看護師の決断

その後、一度しか現れなかった看護師長に変わって、新しく若い看護師があらわれる。彼女もはじめのうちは、看護師長と同様、ジョーに感情移入する。彼女は、ジョーがたとえ見えなくとも彼の横に一輪の花を添え、たとえ聞こえなくとも彼に声をかける。先に見たような「もし私が彼だったら」という仮定のうえで成立する感情移入にもとづき、彼女は行為し続けるのである。もちろん彼女はまだ彼に意識があることはわかっていないし、これらの行為においては、彼に意識があるかどうかは問題になっていない。それはまるで、ペットや乳児にやさしく接するときのような行為である。しかしその行為は、結局のところ、彼の事的身体がある場所に移入された自己、つまり、花を見たり声をかけられることで喜びを感じる自己を、自分自身でケアしようとする努力にすぎない。彼女の能動的な働きかけは、想像上で移入された受動的な（享受する）自己が満足するかぎりでの行為なのである。唯一看護師長とこの看護師の違いは、自らの「全能感」が打ち砕かれる場面に出くわし続けているという点である。彼女は、彼を前に何度も涙を流しながらそれに耐えている。彼の永遠の悲劇と移入さ

11 Searles, H, F. : Feeling of Guilt in the psychoanalyst : Countertransference and related subjects, New York, International University Press, §2, 1979. サールズは、このような医療者が抱えざるをえない罪責感の由来を、さらに次のように解釈する。すなわち、そもそも人が医療に従事する仕事につこうとするのは、「その人が〔こども時代に〕両親を癒すことに失敗してしまったのだという無意識の罪責感」に駆り立てられてのことなのである、と。

れた自己の一瞬の喜びのズレが、彼女の行為の無力さと無意味さと自己欺瞞を際立たせるのである¹²。

彼女は、しばらくの間それに耐えているのだが、ついに彼女は、自らの行為の意味を、相手の反応（reaction）のなかで見いだす手段にでる。彼女は、ジョーが唯一『守り通した器官』である男性器を愛撫し、射精させるのである（映画ではこれはメタファーで示される）。その行為は、移入された自己に向けられた行為ではなく、彼の事実に身体に向けられた行為である¹³。次いで彼女は、彼のその身体の上に文字の痕跡を残すという行為にでる。つまり、彼の胸の上に、『MERRY CHRISTMAS』という言葉の指でなぞるのである。その時ジョーは『ついに日付を獲得した！』。この新しい日付、もしくは真の今の獲得は、彼の事実に身体を産み落とした出来事を無効化させるだけのインパクトがある。彼は、被弾してからどのくらいの間気を失っていたかという答えの出ない問いを捨て、この新しい今から生きはじめようとする。

その直後ジョーは夢をみる。そこではどうやらクリスマスパーティーが催されている。視点の固定されない雑多な空間のなかには、イエス・キリストという名前の自分のこどもを見失って探しているアフロアメリカンの夫人がいたり、同じ言葉をただひたすら反復するだけの滑稽な社長がいる。その部屋から出ると外は静かな森の中。そこでは、ひとりの若い女性を膝の上に横たわらせた父親が蜂蜜をなめている。その女性は実はジョーの恋人なのだが、彼にはそれが誰だかわからない。また父親についても、すでに死んでいることにどこかで気付いている。そのとき、どこからともなく『ジョー…ジョー』という恋人の声が聞こえてくる。姿は同定できなくとも、声だけはそれが恋人のものだとわかった彼は、それを頼りにしながら、隠れん坊をしているつもりで彼女を探そうとするのだが、すでにその愛しい女性を永遠に失ってしまったのだと彼は悟る¹⁴。と同時に、父親から重要なことを思い出される。それは、彼がこどもの頃、友達と電信（telegram）をうって遊んでいたことである。

彼は目を覚ますと頭を縦に振り、近くにいる誰かに必死で電信する。その場に居合わせた看護師は、彼のリズムのとれた運動になんらかの意味があるのではないか、と思いはじめる。しかし医学的知識も電信の知識も持たない彼女は、軍医や電信士や聖職者を呼んでくる。そこでようやく、彼の周囲の人間たちは、彼に鮮明な意識があり続けていたことを知るのである。そして、軍医たちは、『あなたは何を望むのか（What do you want）』とジョーの額のうえで電信する。そして彼は応答する。『私は外に出ることを望む（I want to go out）。そうすれば、人々がこのような存在である私を見れるようになる。カーニバルジョーに私を出してください。…もしあなた方が私を世間に見せることを望まない

12 この映画は、実際にはジョーには意識があるにもかかわらず、彼には意識がない判断されているというズレがあることと、彼自身話せないということに由来するズレがあることのため、無意味な行為という例の最大値を示している。しかし、実際の看護の現場にあっても、感情移入が「私が目の前の患者なら」という移入の条件に従う以上、それにもとづく行為は、他人の内面が完全に理解できないことに由来するズレを生じさせる。感情とはあくまで自己の感情であり、他人の感情を自分に移し入れることはできない。そのうえ、感情移入は意識的努力によって生じるのではなく自発的に生じる。この自然さは、註11でみたように、当人が幼少期に両親をケアできなかったという「罪責感」とそれを補おうとする「全能感」の程度に依存すると考えられる。その自発性が行為の無意味さを際立たせれば際立たせるほど、対人援助者の燃え尽き症候群（burn-out syndrome）の可能性が高まるといえるだろう。

13 これが感情移入にもとづく行為ではないという理由は、彼女にはペニスという器官がないということのうちにも見いだせる。

14 これを象徴的に解釈すれば、クリスマスの日に、つまりキリストが失われた日に、彼はもう一度産まれ直したのだ、ということが暗示されているといえる。

15 彼の固有名が発せられる場所は、彼がすでに失ってしまったものの場所である。

のであれば、私を殺してください (kill me)』。彼の応答は、集団のなかで生きようとするものにとっての必然的な二者択一である。つまり、「自由か、それとも死か」というヘーゲル的な二者択一である。¹⁶

ここではいわゆる「患者のニーズ」が問題になっている。彼の『外に出ることを望む (I want to go out)』という発言は、「人々が奇妙な姿をした私を見ることを望むこと、そのことを私は望む (I want people want to see me who be strange)」というニーズに翻訳でき、それは、他の人間たちのニーズを的確にとらえたうえでの経済原理に従った労働意欲である。他方の『私を殺してください (kill me)』という命令は、自らの手で自らの命を絶つことができない彼の状況を考慮すると、次のニーズに翻訳できる。すなわち、「誰かが私を殺したいと望むこと、そのことを私は望む (I want someone want to kill me)」というニーズである。ところで、ニーズとは一体何なのか。

「ニーズ」を辞書で調べると、それを生理的なものと社会的なものを区分したうえで、人間に普遍的な諸々のニーズとその満足のままざまな型が説明されている。¹⁷そこではいわば、不特定の自己のニーズがとりあげられているわけである。しかし、「患者のニーズ」という言葉においては、医療従事者にとっての他人のニーズが問題になっているので、他人の生理的ニーズと自己がそれを満足させるやり方との関係、そして、他人の社会的ニーズと自己がそれを承認するやり方との関係が定義されなければならないはずである。

ここで筆者は、前者に、次のような定義を与えたい。「なんらかの理由で当人が満たせなくなった他人の生理的ニーズは、代理行為（医療現場では医療行為という代理行為）によって満たすことができる。生理的ニーズは全ての人間に共通しており、個別の差は、それぞれの身体・環境的状况の違いによって生じる二次的差でしかない」。同じことを、ハイデガーは次のように説明している。「世界のなかに共に相互にいることの諸々の可能性には、ひとりの現存在〔人間〕が、もうひとりの現存在に頼って代理される可能性 (Vertretbarkeit) が属している。配慮 (Besorgens) の日常性においては、こういった代理可能性が、何重にもそして絶えず使用されているのである」。¹⁸たとえば、ジョーの口に代わって噛み砕かれた食事が看護師によって彼の喉に流し込まれる、といった行為などがそうである。またそれだけでなく、軍医の指令書に記されたものすべてが、「代理される可能性」の総体である。また、患者の生理的ニーズのみが主題化されている場合にかぎり、その患者が今置かれている身体・環境的状况と自己のそれとの違いが正確に把握されればされるほど、「もし私が彼だったら」という条件付きの感情移入にもとづく行為が役立つのである。

他方、後者には、次のような定義を与えたい。「他人の社会的ニーズを代理行為で満たすことはでき

16 ラカンは、1964年のセミナーにおいて、この二者択一に注目している。「ヘーゲルにおいてこそ、疎外するヴェル (vel) [ラカンが使う記号◇の下の方のVの部分を目指す]と私が呼ぶものの正当性が解ります。ヘーゲルにあっては何が問題になっているのでしょうか。そこでは、最初の疎外、いかえれば人間が奴隷の道に入ってゆくにあたっての疎外が扱われているのです。すなわち、自由 [ラカンは「金」とも言い換える] か、命か！です。もし人が自由を選んだら一巻の終わりです。彼は即座に両方とも失うのです。もしも命を選んだら、彼は自由を奪い取られた命を得ることになります」(Lacan, J. : Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse, Paris, Seuil (édition du poche), p.237, 1990)。この映画では、働こうとするジョーのほうが、「金か命か」の二者択一を他人たちに迫っている。そして彼らは、その二者択一の呈示そのものをなかったことにするのである（おそらく、彼の要求は永遠に無視され続ける）。

17 少なくとも『心理学辞典』（1999, 有斐閣）および『看護学辞典』（2002, メヂカルフレンド社）においては、その二つの区分がとりあげられている。また、欲求段階理論で有名なマズローは、「低次の欲求」と「高次の欲求」の区分を呈示するが、それらは大旨、生理的ニーズと社会的ニーズに合致するものだと考えられる。

18 *ibid.*, p.239.

ない。できるのはただ、それに自らをはめ込み、自分を、その他人に対するひとりの他人として位置づけ、その他人に向けて行為することで、その社会的ニーズを承認する (*reconnaître*) ことである」。代理行為が不可能であるというのは、看護師がジョーに代わってカーニバルショーにでることはできないということであり、彼に代わって死んであげることができないということである。ハイデガーがいうように、「どんな人でも、他人が死ぬことをその他人からとって引き受けることはできない」¹⁹のである。さらにいうと、他人の社会的ニーズが主題化されるとき、感情移入の限界も示されていることがわかる。すなわち、死の代理不可能性が、「もし私が彼だったら (*If I were him*)」という条件を成り立たなくさせるのである。他人の社会的ニーズに自らをはめ込む、ということをやより詳しくいうと、*A want B to want to do A* という英語文法の形式において、*A* に他人を、*B* に自分を当てはめることである。映画にそくして具体的にいえば、すでに *A* にはジョーがはいっており、そして、看護師は *B* の位置に自分自身をはめ込もうとするのである。その意味で、医療従事者に固有の社会的ニーズを定義するとすれば、それは、この *B* の位置に入りたいと望むことであるといえる。そしてそのニーズは、「誰かが私からケアされたいと望むこと、そのことを私は望む (*I want someone to want to be cared by me*)」というニーズと表裏をなしているのである。さらに、他人の社会的ニーズは、その他人に向けた行為がなされることで承認される必要がある。この映画においては、看護師がジョーを殺すことが、彼の社会的ニーズを承認したことになるのである。²⁰

5 三つの次元の行為とそれぞれに固有の時間性

：〈零次行為〉、〈一次行為〉、〈二次行為〉

以上の解釈から、最初の軍医、次の看護師長、最後の新しい看護師というそれぞれの医療従事者の行為と、その都度のジョーの身体的・心理的状态の相補的關係をみてとることができる。

最初に軍医は、彼らのまなざしにおいて、事実のなかに知識の「証拠」を瞬時に見いだし、それにもとづき指令書 (*manual*) を作成した。この瞬間性は、ラカンの「まなざす瞬間 (*instant du regard*)」²¹に対応する。ラカンの三人の囚人の思考実験においては、この瞬間は、引き続いて生じる時間の開始を知らせる瞬間であり、可能な限り零に近づく瞬間である。しかしこの映画においては、この瞬間性は、指令書に従った看護行為に引き継がれており、事的身体とジョーの生の分裂を下支えしていた。このような他人の状態と相補的である行為をここでは〈零次行為〉と名づけたい。²³

19 *ibid.*, p. 240.

20 幸運なことに、ジョーには、レヴィナスのいう「汝殺すなかれ」と命令する「顔 (*visage*)」がない。

21 Lacan, J. : *Le temps logiques et l'assertion de certitude anticipée*, *Un nouveau sophisme* : Ecrit, Paris, Seuil (édition en poche), p.203, 1999.

22 紙幅上、内容は割愛する。

23 『想起、反復、反芻処理』のなかで名指されている「演じる」や「行為」は、この〈零次行為〉に当てはまると考えられる。フロイトはいう。「被分析者は、そもそも、忘却され抑圧されたものを想起するのではなく、これを演じる (*agiere es*)。被分析者はそれを、想起としてではなく、行為 (*Tat*) として再現するのである。つまり、自分がそれを反復しているとは知らないままに、それを反復するということである」(Freud, S.: *Erinnern, Wiederholen und Durcharbeiten* : G. W. X. Imago, London, p. 129, 1996)。これはフロイトによる「転移」の説明であるが、「転移」においては、相手の人格は問題にならず、自己の「無意識の幻想」のテストである知覚とその瞬間性を引き継いだ「演技」を補完することのみが、相手に期待されているのである。この〈零次的行為〉である「転移」を補完する「逆転移」とは、自らの事的身体と生の解離を積極的に

次の看護師長は、「もし私が彼なら」という仮定において成立する感情移入をする。この仮定は、『私にはできる!』という「全能感」と結びつき、他人の権能 (pouvoir) よりも自己の権能を優先させたのである。次にあらわれた新しい看護師の感情移入と「全能感」は、挫折し続け、彼女はそれに耐え続けなければならなかった。²⁴この耐える時間は、ラカンの「理解するための時間 (temps pour comprendre)」²⁵に対応する。ラカンにおいてこの時間は、来るべき決断のために、想像の中で他人の思考を思考することが急かされている時間である。しかしこの映画での感情移入は、窓を開けたり、花を添えたり、話しかける実際の行為を誘発している。そしてそれらの行為は、看護師にその意味を与えるのではなく、耐え続けなければならない無意味を与え続けるのである。またこの行為は、ジョーの懷疑を止めると同時に、彼に欺かれる道を選ばせている。そういった性質をもつ行為を、〈一次行為〉と名付けたい。

最後に、看護師が、ジョーへの感情移入の限界を突きつけられ、彼のニーズのなかに自らをはめ込み、ひとりの他人となる契機がおとずれる。この契機は、彼女がジョーに時のはじめを与えた行為、つまり『MERRY CHRISTMAS』と胸のうえに痕跡を残したことと無関係ではない。²⁶この時を与える契機は、ラカンの「決断の契機 (moment de conclure)」²⁷に対応する。ラカンにおいてこの契機は、決断したものが、行動する身体を他人に曝し、躊躇の瞬間を生み出しもするのだが、最終的に各々の主観的な時間の客観化させる契機である。しかしこの映画の場合、看護師の決断そのものである行為、つまり彼を殺すことで彼のニーズを承認する行為は、完遂できないで終わってしまっている。このような他人のニーズに自らをはめ込んだうえでそれを承認しようとする行為を、〈二次行為〉と名付けたい。²⁸

【謝辞】

本論は『ジョニーは戦場へ行った』の解釈にもとづいているが、この映画は、西村ユミの『語りかける身体：看護ケアの現象学』（2001, ゆるみ出版）のなかで紹介されており、筆者はそこではじめてこの映画を知った。この映画を教えてくれた著者に感謝したい。また筆者は、この映画を、尼崎健康・医療事業財団看護専門学校での心理学の授業の教材として使わせていただいているのだが、これを上映した際の学生のみなさまからいただいた感想や私の解釈に対する疑問は、本論を作成するにあたっての核となっている。この場を借りて、当専門学校の10期生と11期生のみなさまにも、深い感謝の意を表明したい。

引き受けている状態といえるかもしれない。

24 鷺田清一の『「待つ」ということ』（2006, 角川書店）は、この事態を非常に細かに分析している。

25 *ibid.*, p.203.

26 この映画のなかでの〈二次行為〉は、定義上、完遂しなかったもののジョーを殺そうとした行為だけだと考えられるわけが、看護師が彼の男性器を愛撫した行為と彼の胸のうえで『MERRY CHRISTMAS』となぞった行為は、〈一次行為〉からは区別することができるという意味において、この二つの行為を〈二次行為〉の準備として位置づけたい。しかし、なぜこの〈二次行為〉に準備が必要だったのかはわからない。ラカンの「決断の契機」においては、それを分割しなければならない必然性はない。今後さらにこの三つの行為の解釈を進めたい。

27 *ibid.*, p.204.

28 精神分析における解釈という行為は〈二次行為〉に入れることができる。また、〈零次行為〉における知識、〈一次行為〉における感情、そして〈二次行為〉におけるニーズは、ウィルフレッド・ビオンの「記憶なく、理解なく、欲望なく」(Bion, W. R.: Attention and Interpretation, Karnac, London, §4, 2007.) の「記憶」と「理解」と「欲望」のそれぞれ対応すると考えられる。それらについては、今後議論を進めていく予定である。